

新病院長挨拶

長年、推進してきました地域に密着した医療に加えその多様化に対応すべく診療の充実と医療周辺整備をすすめ、利用される皆様の要望に応えることができるよう努力してまいりました。

救急傷病を含む急性期疾患や一般疾病のほか、がん循環器疾患などに対し、画像診断等の最新診断機器と臨床医療技術を駆使し、速やかで満足できる治療を推進するとともに、運動療法や食事療法などを中心とした慢性期疾患治療、さらに在宅治療まで、疾病に悩む方々の心情を深く理解しながら、一貫した治療を行っております。

また、院内各科の診療連携を密にして総合的な医療を心がけ、一方、院外における病院から病院、病院から診療所、さらに福祉、保健機関との連携をも重視した医療を目指し、当地域の中核的病院として、皆様から深く信頼され、心暖まる病院づくりをすすめております。

今後とも、疾病の治療・予防に当院をご活用いただければ幸いです。なにとぞ、尚一層のご支援、ご指導をお願い申し上げます。



公立宇出津総合病院 院長
兼外科医長 長谷川 啓

病院の行事（1月）

仕事始め式

1月4日（水）、午後5時から仕事始め式を行いました。

新年の挨拶として、持木町長は「難しい仕事ほど、放棄せず、とりかかること。とりかかることこそ、重要だ」とお言葉がありました。

また、滝川院長は、今年の病院経営についての抱負や今年度策定する、新・病院改革プランを取り上げられ、「職員の皆さんに様々な改革をお願いすることになる」とお言葉がありました。



病院の行事（1月）

院内接遇研修会を行いました。

1月19日（木）、24（火）午後5時30分よりヒューマンメディカルリサーチ株式会社から講師をお迎えして、院内接遇研修会を行いました。

「接遇」とは、相手の立場に立って自分自身の言動を整えて対応することであり、院内で患者様が接する、すべての職員の接遇一つ一つが積み重なり、病院の評価につながることを学びました。

また、評価の向上の為には、たとえば、返事の際に、常に笑顔で「はい」と答える等、自身では見えない「表情管理」が重要で、スカンジナビア航空会社を立て直したCEOの著書「真実の瞬間」にもあるように、顧客が従業員と接するわずか15秒間で企業の成功が左右されるほど、「接遇」が重要であることがわかりました。



理念 「笑顔で心のこもった良質な医療サービスの提供」

基本方針

- ・地域住民の人々に信頼される病院を目指します
- ・よりよい接遇と思いやりのある病院を目指します
- ・質の高い医療を提供できる病院を目指します

最近の出来事（2月）

「看護の仕事」出前講座

2月1日（月）、当院の久田朋子看護師が「看護の仕事」講師として、能都中学校の1年生に医療や看護業務について講話を行いました。

久田看護師は、看護師を続けられている理由に新人時代、担当した患者さんの息子さんからもらった、今も大切にしている宝物の話をしました。

それは、一見ぶっきらぼうに見え、不信感さえ抱いたその息子さんから、便箋でも、手紙でもない、大切な母親に対する、ウラに久田さんの看護への感謝の言葉が綴られた「パチンコ広告のチラシ」をいただいたとのこと。

忙しくても、心を込めて看護したい、患者さんを自分の大切な家族だと思って看護したい。

そう思えるのは、このような患者さんや、そのご家族からの心がこもったありがたい言葉があるからとのことでした。

また、生徒同士にて、聴診器やパルスオキシメータの体験も行われました。



最近の出来事（2月）

「交通安全ちょっとアドバイス」キャンペーン

2月15日（水）、当院の正面玄関、ロビーにて高齢者の交通安全対策として、能登町交通安全協会会員らが、バレンタインのチョコレート及び夜行反射材の配布を行いました。



病院の行事（2、3月）

医療安全管理研修会を行いました。

2月23日（木）、3月9日（木）、午後5時30分より、2階講義室にて「医療安全管理研修会」を行いました。

8月に続き、2回目の研修会のテーマは、「実例に学ぶ針刺し事故対策」と題し、ニプロ株式会社北陸支店 武田裕貴氏をお招きして行いました。

ディスポ針、シリンジ、翼付針のそれぞれについて、薬液吸引ができない、ガasketの所からの液漏れ、ホルダの中に指を入れてしまった、etcと具体的な事例を基に、その原因と対策について、学ぶことができました。



病院の行事（2、3月）

院内感染予防対策研修会を行いました。

2月27日（月）、3月2日（木）午後5時30分より「院内感染予防対策研修会」を行いました。

8月に続いて、今回2回目の研修会は、講師に公立穴水総合病院内科医長の石崎武志先生をお迎えし、「結核について」講義していただきました。

我が国の結核感染の特徴は、新規患者は年々減少しているが、平成27年の罹患率は、14.4（人口10万人対）と依然として結核中蔓延国であり、罹患者は高齢者が多いが、地域格差が大きく、大阪や東京など大都市に患者が多いとのこと。

補助診断法として、IGRA（患者全血に結核特異抗原を加え培養し、リンパ球から遊離するIFN- γ を測定する方法の総称）が近年用いられ、QFT-3GやT-SPOTがあるが、古い感染か新しい感染かの区別ができないなど、限界もあるとのこと。

結核罹患者の胸部X P、胸部C T画像の非典型的陰影の解説や、講義後、疑い段階でIGRAを実施すべきか、接触者のリストアップの判断の難しさ、喀痰塗末検査、PCR検査における検体の質やタイミングによる陽性陰性の出方など、現場での判断に直接つながる質問が寄せられる有意義な講義となりました。



最近の出来事（2月）

「看護の仕事」出前講座

1日の能都中学校に続き、2月10日（金）当院の尾形祥枝看護師が「看護の仕事」講師として、柳田中学校の1年生に医療や看護業務について講話を行いました。

尾形看護師は、父の姉妹の方が看護師として働いている方が多く、その影響もあり、小さいころから他の職業に就きたいと思ったこともなく今に至るとのこと。

また、看護師の仕事の魅力として、生命の誕生から終わりまで貴重な瞬間を共に過ごせること、その責任の重さに押しつぶされそうになる時もありますが、共に笑い、共に泣き、退院、社会復帰に向けてお手伝いできるところだとのことでした。

生徒達からも多くの質問が挙がる、有意義な講義となりました。

